

史料にこだわりこだわらず

石田千尋

学生時代、史学科に席を置いていた私にとっては、文献史料こそ歴史資料そのものであり、物や絵画などは二次的・三次的史料であった。くる日もくる日も未刊の近世文書を読み、400字詰原稿用紙に積文を取ることを生甲斐としていた。この地味な作業が実証を旨とする歴史研究の基礎を支える、という考えは今だに変わっていない。しかし、当時それだけに終始してしまっただけの硬直した態度では、どうしても乗り越えられない壁に激突したことを覚えている。

そのころはじめていた江戸時代のオランダ船貿易品の研究はまさにその典型であった。「へるへとわん」「羅背板」「奥嶋」「笥崩嶋」「しゆりしや嶋」「しゆくたす嶋」「たあれす嶋」。オランダ船が日本に輸入した数々の染織品の日本名は、異次元のことばとしか思えなかった。そこではじめてのことは、原語であるオランダ側の物品名をオランダ史料によって明らかにし、一つ一つの単語の意味を解明することによってその品物を理解することであった。しかし、品物に関して文献史料のみの考察はおのずと限界があり、どうしても実際に輸入された現物を確認していくことが求められた。ところが、文献史料中心に研究をしてきた私にはどのように現物にあたればよいかまったく見当がつかなかった。文献史料で解明された範囲で、現在造られている最も近い物を見てみたが何も伝わってこない。やはり当時輸入された実物に触れてみたいという欲求はつねのつねばかりであった。そのような状態の中で、神戸市立博物館開館記念特別展『海のシルク・ロード』（1982年11月）という図録がふと目にとまった。

それをめくる内に「反物見本帳」が目飛び込んできた。これは、江戸時代に輸入された反物を鑑定・評価した反物目利と呼ばれる役人によって作成された反物裂の見本帳であった。これをきっかけに、「反物見本帳」を各地に求めつけ、今までに300冊近く閲覧することができた。文献史料では十分解けなかった数々の謎を見事に解決してくれている。日本側の文献史料とオランダ側の文献史料、さらに反物裂という現物史料がそろってはじめて研究が緒についた。

また、近年バリ国立図書館で石崎融思の描いた「蛮館図」10枚がみつき、その中の「検使鑑貨図」では輸入品の加工前の形状を確認できた。さらに、長崎市内をはじめとする各地の遺跡からは、江戸時代にオランダ船が輸入した品物が発掘されており、それらの中には、帳簿をはじめとする文献史料と見事に一致するものが含まれている。文献史料ばかりでなく、物史料・絵画史料に目を向けられるようになってきたことで実証性が増し、新たな発見もできてきた。

『鶴見文化財学会報』vol.1で石井進先生が述べられているように「これが文化財学だといえるような決定版など、まだどこにも出ていません。」模索の中で、一つのことを、考えうるあらゆる手段を講じて究明していく、実証していく、そのことを念頭において、文献・物・絵画・地図などあらゆる史料に十分な批判を加えた上でこだわりなく活用していく、そんな姿勢の中から新たな発見が生まれ、文化財学の一翼を形成していけるのではないかと考えている。

(本学教授)

苦い思い出

中里 嘉克

平成7年1月17日(火)

あの忌わしい阪神大地震が突然起ってもう6年も過ぎてしまった。この直後に自分の内に生じた苦い思い出はこれからも、いやでも思い出すことだろう。自分がこれから何をすべきか、まったく判断出来なかったからである。辩解がましく言訳すれば、文化財に携わる多くの人もそうであったかもしれない。

刻々と地震の規模が明らかになると、想像を絶する大地震であることがわかって来た。関西の友人の安否を気遣う気持はあっても、被災したであろう文化財に対して、自分がどう行動していいかの配慮がまったく思い浮かばなかった。今思うと迂闊だったし、どうして職業意識が働かなかったのか不思議に思う。

その時点では文化財関係者の多くが大地震の様な災害に機敏に対応するノウハウを充分持っていなかったのも事実であろう。なにしろ、これまでの災害は局部的なものにとどまっていたから、社会全体が破壊される様な大災害は幸か不幸か経験していなかったのだから。誰しものが再び関東大震災の様な災害が近く起ると聞かれてはいるが、阪神大震災の前に(震災の前に)文化財についての対策を本気で検討していたとは思えない。

日本では災害は例年の様に生じているが、それらは「点」の被害であって資材を地元で調達する事は難しくない。大災害は「面」として対応しなければならないから交通手段などを考えると、あらゆる面で活動が制限されてしまう。だから充分なノウハウが蓄積されていないと後手にまわってしまうだろう。

災害時の文化財救護だけでなく、最近では日本政府の緊急時の命令系統の不備が指摘され問題になった。首相が不在になった時、誰

がどこで指揮するかが明確でないらしい。文化財救援も同じことで、大災害に際しては早急に組織を作り、適確で能率的な情報が伝達される様にしないと、深刻な結果を招くことになりかねない。

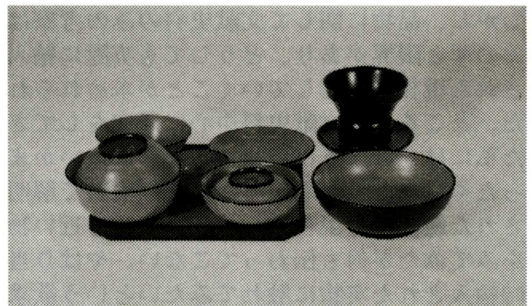
平成11年11月出版の「活動記録*」によると1月31日には文化庁による被災状況の視察が行なわれ、2月8日には文化財レスキュー隊が救済に当たっている。学会(古文化財科学研究会:当時)主導ではあったが、この時の活動は大きな成果をもたらしたと評価される。

話は逸れるが災害は日本ばかりではない。10年ぐらい前にフィレンチェで起った大水害で被災した紙類文化財の保存には国際的救援班が組織され活躍した。これからは国際的な規模の文化財救済の事業にも対応しなければならなくなる。(本学教授)

※阪神・淡路大震災被災文化財等救援委員会
活動記録(平成11年11月)

【建長寺出土漆器の復元】

中里先生の手により成る



H11~12年に鶴見大学が受託した建長寺境内の発掘調査で室町時代の膳碗セットが出土した。火災に遭って焼けた破片をもとに、当時の完全な姿がこの度復元された。

文化財学会 春季・秋季大会関連報告

〈春季大会〉

講演「紙と考古学」をきいて

報告 2年 阿部 潤
稲村太一

平成十二年六月十日（土）に行われた春季大会では、「紙と考古学」という題で日本考古学協会の平井尚志先生にご講演をいただきました。

平井先生は紙と考古学という一見すると考古学の分野外とも思われる内容を、たいへん興味深くお話しして下さいました。

先生は立教大学の経済学部を卒業後、太平洋戦争を経験され、その後大手の紙問屋に就職され、仕事を続ける傍ら考古学を学ばれていたそうです。先生は、まず紙に関する基礎知識をお話しして下さいました。

日本が紙の生産においては世界第二位であるということや、電子メディアの発達した現在においても紙の消費量は以前とまったく変わらないことなどを指摘されました。

そして次に実際に紙と考古学の関係について、紙というものの考古学的な発見をいくつかの事例から指摘されました。

紙の考古学上での発見は、中国の敦煌で発掘されたものが最古であることや、以前はヨーロッパが起源とされていた紙が実はアジアが起源であることが、考古学の成果によってわかったことなどを指摘されました。

そして最後に、本来考古学の対象外とされてきた紙は、実は考古学においても重要な資料であり、紙そのものを文化財として考えることがこれからは重要になってくるということでした。

また、講演終了後には質疑応答が行われました。ここではいくつかの質問が挙げられ、発表を補足する、非情に活発な質疑応答となりました。

以上、今まで私達の知らなかった紙の歴史、文化史を教えて頂いた、有意義な文化財学会春季大会記念講演でした。

〈秋季大会〉

田中城発掘調査について

熊本県三加和町教育委員会 黒田 裕司

田中城は和仁氏の居城であるが、築城についてははっきりしておらず、現段階での確実な最古の記述は、広瀬文書の暦応三年（1340）十一月十日の項にある「肥後国凶徒等楯籠同國鱈城候之由…」である。落城は、安国寺恵瓊が佐々成政に宛てた天正十五年（1587）十二月七日付けの『安国寺恵瓊書状』に「一昨日落去候」「迎春事、忠義仕候間」とあることから、迎春氏の裏切りで十二月五日に落城したことがわかる。このことから、少なくとも250年は存続していたと思われる。

地形を見てみると、田中城の北から東の背後には福岡県境からつづくやまなみが迫っており、和仁川流域に発達した水田地帯を臨むように舌状の台地が延びている。この台地の根元を断ち切るにより独立した丘陵とし、城が形成されている。中央部に長径約50m、短径約42mの平坦部がありこれを主郭とし、西側を除く三方の約1～2m下方に幅約10～50mの曲輪を設けている。これより約10m下がったところに幅約10mの空堀を、西側を除く三方に約300mにわたって巡らしている。また、空堀を挟んだ南・北・西の三ヶ所には、以前から地元で物見やぐらと呼ばれる高台が残っている。

田中城は、熊本県玉名郡三加和町大字和仁字古城に所在し、昭和61年4月15日に県内の中世城として三番目の県指定を受けたのを機に、発掘調査を開始した。その結果、主郭部から14棟の掘立柱建物跡が確認されたほか、大規模な土木工事を思わせる深さ6mにもおよぶ空堀、捨て曲輪、連棟式建物跡、石倉、石切場、溜め井戸跡、攻め手側のやぐら跡などの遺構が検出されている。主郭部で確認された掘立柱建物跡は、2間×3間のものが11棟と多く、平均の大きさは3.97×6.36mとあまり大きくはなく、柱間寸法も一定しておらず規格性は見られない。中央部の建物跡はかなり切り合っており、3～4時期が推定されるが、個々の建物の時期は明確にできず、一時期の全体配置についてははっきりしない。

空堀は、岩盤の凝灰石を削って作られており、葉研掘の形態をとっているが、全体のうち、まだほんの一部しか調査していないため、全容の

解明までには至っていない。連棟式建物跡についても兵舎跡とか武器庫とかいわれているが、まだ類例が少ないため何とも言えないが、近年、福岡県内で類例が発見されてきているため、今後類例が増えていけばこの遺構の意味もはっきりすることだろう。また、宗教施設と思われる石龕や何等かの遺構・遺物を作るために切り出したと思われる石切場の発見など、今後それぞれの遺構の持つ意味を検討しなければならない。

これらと併行しながら、平成元年に山口県立文書館で確認された『辺春・和仁仕寄陣取図』の検討も行っている。この陣取図は田中城を二重の柵列で取り囲み、その外側に小早川秀包をはじめ安国寺恵瓊・立花宗茂・筑紫広門・鍋島直茂など毛利衆や九州の諸将の陣跡が描かれており、方向や田中城と各陣との距離まで書かれているもので、田中城落城寸前の様子を描いたものと思われる。これまでの調査で連棟式建物跡や攻め手側の「やぐら」と思われる遺構などが、陣取図との対象地から確認されており、この陣取図の信憑性が高まってきている。

遺物は、青磁・白磁・染付など輸入陶磁器のほか、すり鉢・火舎など日常生活用品が多数出土しており、また鎧の小札・冑の前立や鉛製鉄砲玉が49個出土している。

これまで発掘調査は城本体のみを行っているが、今年度熊本県緊急地域雇用特別基金事業補助金で攻め手の陣所推定地の伐採を行うのを機に、今後は陣所の調査も行い、田中城攻めの様子を明らかにしたいと考えている。

秋季大会シンポジウム

「戦国の仕寄図と肥後田中城」をきいて

報告 2年 阿部 潤
稲村太一

平成十二年十一月二十五日（土）に行われた文化財学会秋季大会は「戦国の仕寄図と肥後田中城」というテーマでシンポジウム形式で行われました。

まず基調報告として、田中城発掘調査について熊本県三加和町教育委員会の黒田裕司先生から御発表いただきました。主に三加和町と田中城についての概要を述べられた後、スライドを使用して十五年間に渡る、田中城発掘調査についての説明が行われました。

その後、昼休みをはさんで午後からは、関連

研究報告が行われました。

まず、本学教授の大三輪龍彦先生が、「注目すべき二・三の遺構」という論題で発表しました。田中城から発掘された多くの遺構の中から主に鎌倉のやぐらに似た横穴式の遺構と、非常に多くの柱穴を持つ連棟式建物の遺構についての発表でした。

横穴式遺構の中には石仏が彫刻されており、遺構の口が西を向いていること等から、この遺構が浄土思想や地藏十王教の影響を受けて造られたものと推測されること、また連棟式建物の遺構については、全国でもこのような事例は非常に少ないため、発掘調査がある程度の広さを持って行われないと、この遺構がはたしてどのような遺構なのかを特定するのは難しいということなどを指摘されました。

次に本学教授の永田勝久先生が「出土鉛弾の化学的分析」という論題で発表しました。発表の内容は、田中城の発掘調査によって発見された鉛弾に化学的分析を施し、鉛弾に使用されている鉛の産地を調べるといふものであり、コメンテーターとして参加して下さった東京国立文化財研究所の平尾良光先生を交えての議論はたいへん興味深いものでありました。田中城以外での出土鉛弾の事例と比較してのお話しは実に説得性のあるものでした。

そして最後に本学教授の石井進先生が「田中城仕寄図と肥後国衆一揆」という論題で発表しました。田中城の仕寄図は、豊臣秀吉の九州統一の過程で、肥後の国衆であった和仁氏と秀吉から肥後一国を与えられた佐々成政との抗争の中で、和仁氏の居城である田中城が攻め落とされ、落城する時の城攻め絵図であるということを示すべられました。

また、この田中城の仕寄図と落城の過程は深い関係にあり、田中城の陣取仕寄図は日本最古のものである上に、仕寄図とともに軍中法度などの文章が記されていることから、この仕寄図は非常に貴重なものであるということを示すべられました。

そして最後に講演者の先生方とコメンテーターの平尾良光先生と本学非常勤講師で建築史が専門の鈴木亘先生、熊本県文化課大田幸博先生を交えてのパネルディスカッションが、本学教授の河野真知郎先生の司会で行われました。

非常に活発な議論が交わされた後、秋季大会のシンポジウムは盛況のうちに幕を閉じました。

学会 左見右見

文化財学会への思い

文化財学科2年 和田 知穂美

私がこの鶴見大学の文化財学科に入学したのは、実習などが多いという理由です。まだ開設されてから間がないという不安はあったものの、その生活は私の期待をはるかに超えた素晴らしいものでした。

他の大学では、一年生のうちから実習をさせていただけるというところはほとんどないでしょう。けれどもこの鶴見大学の文化財学科では、一年生のときから土器のレプリカなどを使って実習を行ないました。去年の夏には校内にある実習場を使って発掘実習を行ないました。また、各地を巡検や実習旅行などでまわることもできました。それらはただ学問として楽しかっただけでなく、新しい友人ができたり、クラスの団結力を高められるという、非常に有意義なものでした。

そして、一昨年に設立された学会。毎回総会のために素晴らしい公演を聞くことができ、学会活動と同様、非常に有意義なものです。また学会活動を通して興味のあることを研究できるというのも、学会の魅力のひとつだと思います。

私達は、なにかわからないことがあると直接教授に聞きに行くことができます。他大学の友人にいわせると、それは珍しく、素晴らしいことであるとのことでした。私達が当たり前に思っていたことが実は他大学ではあまりないことだったので。この素晴らしい環境に感謝しながら、これからも学問に励みたいと思っています。

今後の文化財学会に望む事

文化財学科3年 礒部 太一

生意気極まりない表題ですが、今年で設立三年目の文化財学科、二年目の文化財学会ですが、この学科、学会への今後の要望という事で、私見で恐縮ですが今後の学科、学会の活性化に僅かでも役立ってくれればと思います。

まず、学会設立と同時に“研究部会”が設置されましたが、設置以来結構な時間が経っているのに関わらず、今日までのところ研究部会数はあまり変わらず、またメンバーも一つの学年に偏りが目立っているという点が挙げられま

す。せっかく学会設立と同時に立ち上げた組織なので、学科、学会からも後押ししてってもらえれば、と思います。またその活動内容や、活動報告の場を学会総会以外の場でも設けられるならば、研究部会も活発化するのではないのでしょうか。

もう一点としてはその研究部会の種類として、先史時代～近世が主流で、文化財学科の特性を生かしていますが、近隣の横浜、東京にも目を向けてみると、近年登録文化財が増えている近代遺産にも注目していった欲しいと思います。

研究部会は学科、学会の別の観点での基礎になっていると思います。研究部会の推進で学科、学会の活性化を進めてもらえればいいと思います。

文化財学会に参加してみませんか

文化財学科3年 猿田 功一

先日、文化財学会の会報の原稿の依頼があり、このような場に私のようなものの文章が掲載されることにはささか感いもありましたが、文化財学会に何かお役に立てればと思い原稿をお受けしてみました。

文化財学科は今年で四年目を迎え、一年生から四年生までの全学年が揃うこととなります。そこで文化財学会の活動に於いても、ますます活発になっていくことが期待されます。しかし、まだ発足して年月が浅いこともあってか、私自身を含め文化財学会に対する関心が薄いように思われます。また活動に於いてもまだまだ活発とまでは正直言って言えないと思います。もっと一人一人が意欲を持って活動し、意見を持って発言するようになればきっと良い方向へと向かっていくことでしょう。とりあえず何か自分達にできる身近なことから動いてみてはどうでしょうか。文化財学会の中には、それぞれの部会というものがあります。この部会は調査や研究、意見交換などを行って自分の興味に則して行っていくものです。部会に所属している人は、その中で意欲的に行動し、まだ部会に所属していない人はそれぞれの部会を覗いてみて、自分の調査、研究してみたい分野であれば入ってみるのもよいでしょう。また、他にやりたい分野があれば自分達で立ち上げてみるのもよいと思います。文化財学会はまだ動き出したばかりです。伝統を造り上げるのも、今ここにいる一人一人なのではないのでしょうか。このチャンスを生かしてみてもどうでしょうか。

研究部会報告

江戸東京研究部会

江戸東京研究部会は昨年5月下旬、文化財学会役員会において設立を承認された第4番目の部会で、その名の通り江戸東京を研究対象としています。活動目的としては、実際に現地を歩き、交通や食文化等様々な視点から江戸東京の地を見る事で、同地域の近世・近現代を中心とした時代を研究し、今後の研究に役立てる事です。

今年度の部会としての活動は、わずか3回にとどまりました。月毎に巡検計画はあったのですが、そのチャンスを生かせなかったのは残念です。今回は、過去3度の巡検とこれからの活動指針等を報告しようと思います。

まず活動ですが、第一回は5月で、その一步は江戸交通の起点である日本橋に始まりました。関先生を迎え、わずか5名でのスタート。当地を出発点とする事は我が研究部会にとって大きな意味がありました。

第二回は、上野・谷中・浅草・隅田川下りというボリュームたっぷりの内容でした。この時は関先生の他、学習院女子大の学生を招いての交流巡検。正岡子規邸跡、谷中霊園、上野東照宮、浅草寺等を経て、最後は隅田川を下って日の出棧橋で解散しました。

そして三回目は博物館研究部会との合同巡検として東大キャンパス遺跡展を見学。

我が研究部会では、会員が個人的に巡検した場合も資料を提供してもらい、写真とともに保存しています。部会としては、近いうちに品川・芝等の巡検を計画中です。文化財学会に「江戸東京」を残したいと考えているので、巡検には振って参加して下さい。

(文責 3年・富川 武史)



鎌倉研究部会

鶴見大学は鎌倉から近い位置にあるため、文化財学科では鎌倉の研究が盛んです。よって私達は、「鎌倉を研究する部会」が学会の中になければならないと考え、鎌倉研究部会を作り、活動しています。研究部会の目的は、考古・文献・民俗・美術などの様々な観点から「中世都市鎌倉」を研究し、その姿をあらわにしていく事です。

今年度は鎌倉へは3回ほどしか行っておらず、極楽寺、建長寺発掘現場、あと博物館研究部会と合同で鎌倉国宝館と市内を巡検しました。急な計画と不十分な連絡のせいで参加人数が少なかったため、反省しています。来年度は鎌倉巡検だけではなく学校で勉強会を開き、もっと活発に活動していきたいと思っています。

研究部会は他の学年の人との交流を深める場所の1つだと思うので、みなさん是非参加してください。活動する日時などは6号館地下の黒板に提示しておくのでチェックしておいてください。専門知識は必要ありません。鎌倉について勉強したい人はもちろん、興味のある人、親しみたい人もOK。是非、鎌倉研究部会にお越し下さい。

(文責 3年・川崎 大樹)



史跡・遺物研究部会

私たちの部会は、遺跡・史跡などの文化財等の研究をおこない、発掘調査にもとづく考古学上の成果をめざし、活動しています。活動内容は、主として、考古学による遺物の観察・実測調査、その他として、文化財等の材質・製作の工程を調査しております。

それらを通して、各人の個人研究を補助することを目指しています。

文化財学科での学び方をふくめ、そこでは

中々触れることのできないアプローチの方法を学びながら考古学、文化財学諸分野の成果を発表したいと考えています。

私たちの研究部会には、研究への問題意識の高い、意欲のある人が集まっていますので、議論も活発に行なわれています。自らの研究テーマをもっている人、これからテーマをみつけようとする人は史跡・遺物研究部会に来てください。研究のつみかさねで、研究部会を盛り上げて行きましょう。(文責 3年・篠原 秀幸)

精神文化研究会

精神文化研究会は昨年設立しました。主な活動は個人活動です。自分が興味を持ったものを自分で調べる、それだけです。テーマも何も決めていないので、みんな「精神文化」という大きな枠の中で好き勝手なことをしています。今年度は、梵字について調べた人、縄文時代から時代を追って精神文化に関わることを考えた人、十二支の成り立ちについて調べた人などなど。たまに集まって自分の調べたことについてみんなと話します。疑問に思っていることを話題に出してみると、誰かが「あ、それって…」と教えてくれたりします。それは教授に教わるよりも確実さでは格段に落ちるけれど、自分で調べる力の力がつくと思います。そして、同じ興味を持つ人と話すことは、とてもたのしいです。

来年度は個人活動に加えて、寺社への訪問や博物館見学を行いたいと思っています。興味を持った方はぜひ参加して下さい。おまちしています。(文責 2年・唐澤 陽子)



博物館研究部会

博物館研究部会では、月一度の活動を目標としていたのですが、振り返ってみたら年三回しか活動できませんでした。

まず、東京大学総合研究資料館で行っていた『加賀殿再訪』と東京大学史料編纂所の見学をしました。特に史料編纂所の書庫や史料の修復現場は普段見られる場所ではないので緊張しました。そこでは、書庫の案内と史料の説明をしていただきました。また、関東大震災によって消失した原本を模写した『東海道絵巻』を見せてもらい、他にも実際に古文書を影写しているところや裏打ちしているところを間近で見て、史料を残すということに色々な工夫や努力が必要なことを知りました。

次に国立歴史民俗博物館で行っていた『天下統一と城』の見学をしました。展示には、いくさに関するパネルクイズ、鉄砲や弾丸のレプリカに触れ実際の重さを感じることができたりと色々な仕掛けがあって飽きることがありませんでした。

三回目の活動は、鎌倉研究部会と合同で鎌倉国宝館や荏柄天神などに行きましたがそれは鎌倉研究部会の報告を見て下さい。

この部会は、やはり自分達で見学することで博物館に対する考えや視野が広がると思うので、是非一度は参加して、それを感じてみて下さい。

(文責 2年・宇田川雅美)



- る。
3. 本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦はかることを目的とする。
 4. 本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
 5. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
 - 1 研究等の発表
 - 2 講演会の開催
 - 3 会誌・会報等の編集刊行
 - 4 親睦その他の事業
 6. 本会に次の役員を置く。
 - 1 会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
 - 2 委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営にたずさわり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
 7. 本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに当てる。
 8. 本会は事務所を鶴見大学文化財学科合同研究室に置く。
- 付 平成11年10月16日から発足する。

学年の年間行事予定

- 6月2日（土）
文化財学会総会（春季）午後1時から
文化財学会講演 午後2時30分から午後4時
- 11月17日（土）
文化財学会（秋季）午前11時から
シンポジウム、その他

編集後記

私が文化財学会の委員になってはや一年が過ぎました。無事にこの一年の仕事を終了させることができほっとしています。今年度は、春季、秋季の大会、学会親睦会が行われ、委員も懸命に仕事をこなしてきました。この会報作りが最後の仕事になります。私たち一年生にとってはすべてのことが初めてで、ただ先生方、先輩方のあとにくっついていただけだったように思います。

文化財学会はまだ始まったばかりですが、除々に「私たちの」学会になってきているといます。来年度はさらに「私たちの」学会にしていこうと思います。 （編集委員）

鶴見大学文化財学会会則

1. 本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2. 本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織す

鶴見文化財学会報 vol.2 訂正とお詫び

鶴見文化財学会報 vol.2 に下記の誤りがございました。訂正をしてお詫び致します。

記

- ・ P1 「史料にこだわりこだわらず」
誤：くる日もくる日も未刊の近世文書を読み、
正：来る日も来る日も未刊の近世文書を読み、

- ・ P3 「文化財学会 春季・秋季大会関連報告」
誤：非情に活発な質疑応答となりました。
正：非常に活発な質疑応答となりました。

- ・ P8 「編集後記」
誤：除々に「私たちの」学会になってきていると思います。
正：徐々に「私たちの」学会になってきていると思います。

以上

また、非常用的な言い回し、漢字などは執筆者の表現を尊重するため、発刊した時の文章のままで掲載させていただきます。ご了承ください。